シカゴ双葉会日本語学校における教育事情

前シカゴ双葉会日本語学校補習校　教頭
茨城県稲敷市立桜川中学校　教諭　平　井　　伸

キーワード：補習校、日本人学校、多様性

１．はじめに

シカゴ双葉会日本語学校補習校（シカゴ補習校）に２年間勤務する機会をいただいた。ここシカゴには「シカゴ日本人学校」もあり、２つの在外教育施設が設立されている。同じ地域に補習校と日本人学校が共存しているのは、世界でも少ない。このため保護者は各自のニーズに合わせて学校を選ぶことができる。この２つの日本語学校は双葉会という１つの組織の中で運営されていて、使われなくなった現地校を10年単位で契約し、補習校が土曜日に、日本人学校が月曜から金曜まで使用している。

補習校と日本人学校の２校体制での運営の現状について報告させていただきたい。

２．シカゴ双葉会の現状と課題

(1) 日本語学校の現状

シカゴ補習校の創立は1966年JCCC（シカゴ日本商工会議所）が中心となって児童生徒数49名でスタート。遅れて1978年全日校が開校され、現在までシカゴ双葉会日本語学校は「補習校」と「日本人学校」の２つの学校によって運営されてきている。2019年４月現在で、補習校730名、全日校146名の児童生徒が、授業日の違いはあるものの同じ校舎を使い学習している。この間日本企業のシカゴ進出に伴って児童生徒の編入者も増え、ある時期補習校は1,000名、全日校は240名を超えることもあった。平日は現地校に通わせ、土曜日だけ補習校に通わせることを選択するのか、日本とほぼ同じ教育課程の中で学習させる全日校を選ぶのかは保護者次第である。ただ補習校の在籍児童数が多いことを考えると、米国で生活するならば子どもの将来を考え現地校に通わせ英語を習得させたいと考える保護者は多い。特に現地校に通わせたいと考える保護者は長期滞在者に多く見られる。ただ３～４年の滞在で帰国する場合、日本の学校に戻ることを考え、全日校に入学させる傾向が見られる。シカゴで暮らすことは自分の子どもを現地校・補習校に通わせてグローバルな物の見方や多様性を培わせるのか、日本人学校に入学させ米国でもしっかりと日本の教育課程の中で学習させるか、選択できる恵まれた環境にある。

(2) 補習校の現状

シカゴ補習校は730名の在籍児童生徒数を抱えていても、文科省からの派遣教員は校長・教頭の２名に過ぎない。派遣教員数の配置定数があり、小中の在籍児童が100名を越えると１名、400名を越えると２名、800名以上になると３名が派遣となる。従って担任や授業を受け持つ教員はすべて現地採用教員である。シカゴ補習校の41名の現地採用教員は土曜日だけ勤務して、学習や生活指導にあたる。もちろん家に持ち帰って、日曜や平日に仕事をする教員も多い。派遣教員は教員が円滑に授業を進められるよう事務や庶務に協力してもらい、準備を進める。補習校の派遣教員には管理職としての職務以外の雑務が多い。日本の管理職のように先生方に指示することで運営できる補習校ではない。このため校長の中には

シカゴ補習校小中高等部卒業式

「なぜ校長がこんなことまでしなければならないのか」と不満をぶつけることも見られた。もちろん派遣教員の主たる職務は現地採用教員の指導力向上を図るとともに円滑な学校運営にあたることである。しかしながら全ての教員が土曜日だけの勤務である。平日であれば派遣教員が教務主任や学年主任に代わってやらなければならない。補習校における管理職の職務は日本の学校現場と同じではないのである。「私は校長なんだから」という気持ちで学校経営にあたっても補習校は機能しない。

(3) 全日校の現状

全日校は他の日本人学校同様ほぼ日本の学習内容に沿った授業や学校行事が行われている。英語については小学部1年から週4時間、中学部から5時間確保されている上、ネイティブの教員による授業のため英語力のレベルはかなり高い。派遣教員は管理職を含めて13名、現地採用教員は専科8名、英語科5名で全教員数が26名になる。小・中学部合わせて9学級、児童生徒数146名でこれだけの教員がそろっているのは、世界の日本人学校でもめずらしい。因みに以前私が派遣教員として在職した台中日本人学校は派遣教員以外に現地採用の教員は2名のみであった。

児童生徒数が200名を越えた時もあったものの、最近は140名を推移している。シカゴ地区に住む日本人家庭の推移は景気の動向にもよるが、日本人学校があっても、補習校に入学させたいと考えている保護者は多い。保護者としてはせめて海外で暮らしているのだから、現地校に通いグローバル社会の中で英語を身につけさせ、週1回補習校に通わせたいと考える。ただ保護者の中には現地校に通うとなると親が学校と連絡を取るしかない。当然親の語学力が問われる。保護者にとって英語で話すことは難しいため自分の子どもには日本人学校へ通ってほしいという親の都合で日本人学校を選択する場合もある。

(4) 日本語学校の課題

シカゴ補習校やシカゴ日本人学校はJCCCの傘下にある団体である。従って日本語学校における予算等の財政や運営に関してはJCCCの組織の1つである学校運営委員会に運営等が委ねられている。運営委員会の構成メンバーは企業の方々のため、実際には日本語学校の事務局が予算等の執行にあたっている。

事務局は学校に置かれていて平日は全日校、土曜日は補習校の事務を行っている。運営や施設設備等共通の予算については事務局が執行し、補習校や全日校の予算についてはそれぞれに割り振られている。当然学校の予算については実態に応じて適正に配分されている。もちろんこの予算の多くは保護者からの入会金や授業料で賄われている。米国は日本と違い物価が確実に上昇しているため、授業料も値上げせざるを得ないのが現状である。

補習校はリーマンショック前に児童生徒数が1,000名を越えた時期もあったがその後は500名台に減少したこともあり、ここ数年は補習校の児童生徒数が増加傾向にある。このため普通教室だけでは賄いきれず、音楽室や理科室などの特別教室を普通教室として使用している状態である。2018年度から特別教室を含めて空いている教室は皆無である。教室用の机ではない大きなテーブルや家庭科室など調理用テーブルで授業を受けている状況である。普通教室は小学部が優先的に使用し、中高部は特別教室の使用を余儀なくさせられていて、授業に集中できる環境ではない。これまで教員から事務局へ教室の確保について再三改善を求めているにもかかわらず、改善される様子は全くない。

シカゴ補習校運動会

それよりも昨年度は補習校の児童生徒数の増加を止めようという動きが見られた。今後児童生徒数の増加によって、教室数が不足するのを恐れ、学校運営委員会は2019年度の補習校の入会金（いわゆる入学金）を450ドルから600ドルに値上げして、それに対して全日校の入会金を750ドルから600ドルに値下げしたのである。このことは何を意味するかというと、補習校の入学者を減

らして、全日校の入学者を増やす意図があったと思える。近年補習校に入学している家庭の状況をみると現地生まれでこの先帰国しない家庭つまり「永住者」の子どもの入学が増え、この「永住者」の入学者を減らすため補習校の入会金を値上げすることになったのである。駐在員家庭の場合、入会金や授業料を会社が負担する場合が多い。しかし駐在員でない家庭では入会金等の値上げが直接家計に響く。補習校の児童生徒の中には駐在員家庭の子どもばかりではない。現地で生まれこの先日本に帰国しない児童生徒も多い。設立当初JCCC会員だけの子どもを対象にして運営していた補習校も、永住者の子どもについても個人会員として入会することで補習校への入学を認めることになった。多くの人々に開かれた補習校として運営されてきているのである。

実際に補習校の児童生徒数の増加に運営委員会としてどう解決を図るか移転等を含めて真剣に協議した時期もあったと聞くが、入会金を値上げして補習校の子どもの数を減らしていく処置はあまりにも後ろ向きではないかという批判が保護者の中から出てきている。入会金を値上げして永住者が入学をためらうようにすることは教育の機会均等から外れてないだろうかという意見も聞かれる。

(5) 補習校に通う意義

赴任1年目の時、当時のシカゴ日本人学校の校長が「補習校は学校ではない」と私に向かって言ったことがある。私はこの言葉に「いや学校です」と言い返したことがある。確かに補習校は法的には学校ではないし、中学部や高等部で授与される卒業証書は高校入試や大学入試を受験できる資格にはならない。指導要録も作成する義務はない。もちろん現地の教育局から認められた学校でもない。それでも私は補習校に勤めている者として「学校」だと言い張った。補習校の子どもたちは「学校」と思って土曜日に登校してきている。そしてたかが土曜日年間41日に過ぎない授業の中で多くのことを学んできているのである。だから「学校ではない」と言うことに対して肯定するわけにはいかなかった。

たかが41日の授業に過ぎない補習校でも日本から遠く離れた地での補習校生活は一生の思い出になる。そのことを私自身補習校の卒業式における卒業生答辞で垣間見ることができた。

答辞を読んだ生徒は中3の時に補習校をやめようか考えた。「今辞めれば現地校の友達と土曜日一緒に遊べる。もう補習校があるからといって1人仲間外れにされなくなる。朝もゆっくり寝ていられる」「しかし同時に、幼稚園から10年間通い続けてきた補習校を本当にここで断ってしまっていいのか。共に長い時間過ごした仲間とも離れることになる。失うものの大きさが見えてきました」

そして彼は幼稚部から13年間補習校に在籍し、卒業式で答辞を読むことになったのである。そして答辞の結びで補習校は家族の歴史であったと付け加えた。父親が運転する車で姉弟3人を延べ23年間送り迎えしてくれ、車の走行距離は181,334km、母親の作ってくれた弁当は1,700個。家族とともに歩んだ補習校だった。彼の言葉は、これから補習校で学んでいく児童生徒にとって、またあらたな気持ちで頑張ろうという決意をもたせてくれる素晴らしい答辞であった。

(6) 多様性を大事にする補習校

現地校と補習校に通う子どもたちは多様性をもっている。それは様々な文化が入り混じる現地校で多くの文化に触れ、吸収しているからである。物事の見方は一面的ではなく、多様な見方が必要となる。多様性を重んじるアメリカ的感覚を現地校で学び、週1回補習校に来て、日本人としてのアイデンティティを確かめているといえよう。多様な考えがいかに必要かアメリカに住んでいるとわかるのだが、日本の学校から転校してくると驚きの連続である。それでも子どもたちは瞬く間に英語や多様性をしっかりと身に付けることが出来る。補習校の卒業式では所々に拍手も見られる。日本の学校では儀式的行事に拍手はできないという雰囲気がある。来賓の方々や答辞・送辞に対する称賛の拍手は、厳粛な中でも必要であろう。これも一種多様性と考えたい。子どもたちは日本人でありながらも多様性を重んじるアメリカ人的気質も吸収している。

3．おわりに

平成4年度から3年間派遣教員としてサンフランシスコ補習校に勤めたことがあり、補習校は2回目であった。

サンフランシスコでの経験から補習校は週１回土曜日だけの授業であり、日本語を忘れないこと、学習の補完的役割程度だろうと思っていた。ところがシカゴ補習校は違っていた。先生たちの授業への取り組みは真剣で、もちろん子どもたちも授業に一生懸命取り組んでいた。日本語力を高める学校であるとともに、運動会などの行事でも精一杯取り組んでいた。世界には補習校が205校あり、おそらくシカゴ補習校は最も日本の学校に近い補習校だと思っている。教頭という職務上PTAとの付き合いも多く、保護者の言動から大きな期待を感じた。期待が大きいからこそ先生たちも期待に応えようと日々努力を重ねている。

シカゴ補習校に勤務でき本当に幸せであった。